

弘前医療技術イノベーションシンポジウム～眼疾患の先端技術の実用化へ～

2016年11月13日、弘前医療技術イノベーションシンポジウムが「光をもう一度—要介護0社会を目指して」と題して弘前大学医学部臨床大講堂にて開催され、会場には約150名の参加者が集まった。シンポジウムでは京都府立医大の木下茂教授による角膜疾患の再生医療の応用、同外園千恵教授による円錐角膜用コンタクトレンズの開発、東北大学阿部俊明教授による網膜への新規薬物送達、岡山大学松尾俊彦准教授による新規人工網膜、京都大学池田華子准教授による新規神経保護治療薬、国立東京医療センター岩田岳部長による遺伝性網膜変性の遺伝子診断などの先端医療技術研究の進捗状況が報告された。いずれの研究も先端医療振興財団からの研究支援を受けて日本発の新規医療技術や知見の発信を目指したもので、今後も弘前の地でもこのような医療イノベーションが発展できるような基盤作りも期待されている。



眼科の新治療に意欲

弘大でシンポジウムが会場

眼科分野の新たな治療法の開発などをテーマにした「弘前医療技術イノベーションシンポジウム」が13日、弘前市の弘前大学医学部で開かれた。国内第一線の研究者による講演後、弘大教授らが会見を開き、医療の技術革新に意欲を示した。シンポジウムは今回3回目。弘大大学院医学研究科の整形外科科学講座と眼科学講座が

医療の技術革新に向け抱負などを語った(左から)中澤教授、石橋教授、木下教授ら

主催した。

視力が低下する「水疱性角膜症」の患者向けに、角膜内皮再生医療の臨床試験を行っている京都府立医大の木下茂教授は「会見で、来年4月に臨床試験が新たな段階に入る。厚労省の承認を目指し、米国をはじめ世界もターゲットに研究を進めていきたい」と抱負。弘大眼科学講座の中澤満教授は「県内の患者ニーズに応えるため、積極的に新たな治療を応用する体制を整えたい」と語った。

会見には弘大整形外科学講座の石橋恭之教授や山本昇副市長も出席。先端医療振興財団(神戸市)の福島雅典臨床研究情報センター

長は、日本の技術革新に関する実力は加速していると「弘前のように大学と行政が一緒になれば、寝たきりゼロ社会が到来すると確信している」と強調した。

シンポジウムでは、木下教授や岡山大、東北大などの研究者計6人が講演。医療関係者ら約150人が、再生医療や人工網膜、遺伝子解析などによる治療を目指した研究の進捗に聞き入った。

(鎌田秀人)